

国際生物多様性記念シンポジウム

「森の木を伐りながら生き物を守る～木材生産と生物多様性保全の両立に向けて～」開催報告

日 時：平成 26 年 4 月 26 日（土） 13 時～17 時

会 場：かでる 2. 7 820 研修室
（札幌市中央区北 2 条西 7 丁目、道民活動センター）

内 容：

林業と生物多様性保全とは、決して対立するものではありませんが、どのような施業をすれば、木材生産と、生物多様性などの公益的機能とを最大限に発揮させられるでしょうか。

シンポジウム前半では、昨年開始されたわが国初となる、保残伐の大規模実験について、試験に関わる三名の演者から行いました。保残伐とは、樹木の伐採に際して、わざと切らないでおく木を残すことで、生物多様性に配慮した林業を実行する方法です。森林総合研究所北海道支所は、北海道立総合研究機構林業試験場、北海道大学と協同で、それを調べるための大規模な保残伐実験をトドマツ人工林（道有林）で開始しました。講演ではこの保残伐実験について、研究と行政双方の立場から具体的な計画や意義、予想される成果が述べられました。

後半では、環境や生物多様性に配慮した林業や森林利用について、国内で先進的な取り組みを行っている林業経営者、森林の生物多様性に関する世界的な研究動向や市民参加型の森林利用について、それぞれ専門の研究者が講演を行うとともに、保残伐実験への期待と要望が語られました。

当日は約 130 名の参加者で会場はほぼ満席となり、あらゆる社会経済活動の中に生物多様性への配慮を組み込む「生物多様性の主流化」の一環としてなされる記念シンポジウムにふさわしい盛況となりました。

プログラム

- 「保残伐の実証実験で行うこと、分かること」尾崎研一(森林総合研究所)
- 「林業の経済性と公益性の両立を目指して-保残伐施業は北海道林業にどう役立つのか-」鈴木匡(北海道水産林務部)
- 「源流域の水土保持と小さな生きものたちの関わり-保残伐施業は水域生態系の多様性に貢献できるか?-」長坂晶子(道総研林業試験場)
- 「命輝く森林-環境配慮型人工林管理技術-」速水亨(速水林業代表)
- 「生態系のプロセスを尊重した伐採施業-世界的な広がりについて-」森章(横浜国立大学)
- 「生物多様性保全と地域づくりに向けた協働-赤谷プロジェクトの挑戦-」茅野恒秀(岩手県立大学)



会場の様子